

れものを洗つて居る年上の仲間を呼びかけて、
「あんたエラ案じてあげてちやつたが、まあ安心しなされ、一本榎の榎
サにや、昨夜嫁御さんが御座つた相なで」
「そのの、何處からえ」

「何でも井永たら清獄たら、細い事は私も知らんが親里あ可成り好
身代で、其代り眼のふちの眞紅いけな嫁さんぢやげな」
「アレあんた見やつたかい」

「否、まんだ見やせんけれどな、彼の近所大評判ぢやがな、小母さんは
嫁御さんが恥しい云で、昨夜からわん／＼泣き通して、誰が何云ても善
昌寺の院寮へ駆け込んだぎり、昨夜あ到頭もどらすぢやげで、私あそれ
聞いて可笑しいやら、氣の毒やらホ、」

「ほんに狂人て仕様の無いもん喃、私あ何うにも榎サが可哀相でならん
がな」

つい傍の茶の間に居て、臺處の二人の話を聞くともなく聞かされた私
は、それからそれへと噂の主の榎サさについて考へましたが、實際一
本榎の榎サは眼のふちの赤いお嫁位我慢しない事には、今のところ普通
一通り揃つた容色の女で、誰一人來て呉れ相な見込も無い、今度のだつ
て屹度誰かのきもいりで貰えたのでせうが、果して未始終圓く納まるか
如何か、今から這麼事云つて縁喜でもありませんけれど、それも少々男
振りがよくないとか何とか、那麼事とは違つて、盲目の老父が久しく中
風でれたまゝ自由がきかず、母親は彼の通りの狂人なり、財産と云へば

一本榎

備後國上下町 岡田美知代

「アノおせき姐さん」と何處かお使ひから歸つて來た銀やは、流して汚

ひばる田地が一坪あるぢや無し、唯々榎サ一人の腕つホして以て養はれ
ばならぬのでありますが、それが又男の身空で、二人の看病から煮焚の
世話迄やつてのけた上では、とても穢きなんぞに出ては居られず、母親
は夜晝の差別もなく暴れ廻ると云つた有様に、榎サは最早見張につかれ
て時には氣もいらつ。

「エーッ情けない、いつそ死去つて仕舞やがれッ」と叫んで、逃げ廻る
母親を引立て、いやと云ふ程烈しく其脊中を打ちのめし、随分手荒な
行儀をするのですが、なほ夜は一々兩戸を釘付けにして寝ないでは安心
がならぬのです。それですもの、大抵のお嫁で居つく道理はありませ
ん。

其上老父と云ふのが大した變り者で、以前は勾當の位を持ち、西備一圓
座頭の取しより逸した男で、立派に琴三味線の指南で遊つたものを、維
新後何に感じてか弟子共のとめるのも聞かず、われから按摩と成り下つ
たので、術にかけては近郷切つての名人と自分も許し他人も認めて居ま
すけれど、いやに高慢で瘡が強く無愛想で、折角の得意先きでも何で
も、先生何卒と云つて頼み込まない限りは、てこでも動かす、旅宿に泊
つて様子を知らぬ旅客が、按摩と呼びかけてすら、其立腹は非常なもの
で、最早現今土地では誰も彼も、すつかり其の呼吸を呑み込んで居ます
から、陰でこそ城次サと其名を呼び捨てに、高慢按摩とそしりもします
が、面と對つては都合上先生々々と敬遠主義をとつて居る、斯様した有
様で所詮はやりはしませんけれど、それでも其日／＼の米代だけは稼い

で、時々は寢酒の一杯も飲んだものですが、此處二三年めつきり弱つて、
まだ息子の出征して居る中から、到頭中風で半身不隨。
息子は今の榎サと死去つた勇一の二人限りで、年齢は恰度三つ違ひの、
何れも骨格逞しい見るから立派な若者でしたから、兄が三ヶ年の鎖臺を
つとめ終つて恙く歸ると、直ぐ引き違ひに弟がとられると云つた始末、
折柄の目露戦争に、歸つたと悦んだ兄さへ又も召集せられ、國家のため
とは云ひながら、貧困な中には何よりの打撃です、母親の心配は最早、
多少町からの扶助と同情はありますが、凱旋の暁、世間から擡入れ
の視ひを受けた時の用意にもと、これも人並なら二人のため、たつた一
枚づゝ手織綿入の特衣にさへ、母親の苦勞はなみ／＼ならぬものでし
た。

而して永らくの戦争中、負傷一つしなかつた勇一は、歸つた時滿洲風を
引き込んで來たとか云つて、少しづつムッコツ咳嗽をして居たのがもと
で、間も無く床につきました。不如意の中から殆んど一年越しの服薬も
何等のきゝめなく、内々お醫者にきけば、所詮肺病ゆる回復の見込みも
無いと見離されて、最初の程は専ら神佛を祈つても見たが、病勢は日に
進んで行くばかり兄弟思ひの榎サが見兼ねて、此寒空に薄汚れた堅い蒲
團の上に、何時迄寝かすも不憐と、中綿から何からすつかり新しく、さ
らさで造へてやつた時は、最早陸軍からの下賜金も残り少なくなつたの
で、狭い女心に母親は居ても立つても居られず。

「コレ榎や、汝やようもそんげな眞似して、弟にさらさの蒲團造へるだ

ら、私が死ぬ時は錦の蒲團造へねやなるまいぞ」と怒鳴つたのがそもそ
もで、それからばかり調子が異つて、烈しい咳嗽に絶え入るやうな勇
一の枕頭に、間がな隙がな、權を可愛哀相だと思はぬかの、何故早く死
んで呉れぬのと、わめき立てるのでこれが現在血を分けた親子のなか
かと、おのゝかすには居られぬ位。

病人は酷く母親を恐れ嫌つて、瘡を細つた手に、兄の手を執つて拳と握
りしめたまゝ、父を呼び兄を呼んだ臨終の際にも、唯一言阿母あとは云
はなかつた。息を引取つて後、初めてそれと氣付いた母親は流石に悲し
く、冷え切つたむくろに取りすがり、氣も狂はしく泣き入つたが、
翌朝愈々葬式の場に成つては、最早何が何やら解らず、人々の抱き止め
るのを振り切つて、行くとも解かず黒黒に降りしきる雪の中を、聲も絶
えなく、

「コレ喃勇一や勇一や、汝あ何故に死にやつた、私が悪いに喃勇一や」と
呼び廻るのでありました。

それから今日迄彼は八十日の上を、夜と云はず晝と云はず、見張りの隙
をぬらつては、いつもこれを繰り返すので。

世間では金惜しさの狂人と、さも人でなしの様に云ひますけれど、私に
は如何しても左様ばかりは思はれません。

去年の夏です、私は其頃脚氣の氣味で、つとめて朝霧を踏む様にとお醫
者からすゝめられ、毎朝定つて眼が覺めると直ぐ、透明の散歩に出かけ
たのですが、清らかな空氣を呼吸し、心地よい朝風に吹かれる事は、

全く健康のため悪い譯はありません、或る朝いつもの通り、私は裏門か

ら白い朝霧が低地に一面蔽ひかゝつて、恰度今夢から覺めたやうな河沿
の小徑を辿り、朝露のしどどに置いた小草を踏み分けながら、涼しい風
が少しく立ち初めて、其爲め霧が懸つては晴れ、晴れては懸る權サが家
の一本榎を目的に、やがて其處までさしかりますと、草屋根のみす
ぼらしい倒れかゝつた家の横手の蔬菜畑で、權サの母親が露を含んで生
々と濃紫の魚一層美しい茄子をちぎつて居ましたが私はハツとして、急
にもと来た道へと引返へすのでした。だつて其様子と云ぶたら、お尻
を高々とからげて有らう事か、まあお腰巻き無しで居るんです、幾らか
まわらないからと云つて、路傍ちやありませんか、何ほ何でも餘り酷いと
思ひましたが、平常から那麽呑氣な女ぢやありません、私共戦争中、ふ
と出会ひました時なぞ、出征中の息子の安否を尋ねますと、最早直ぐ泣
き目立つて碌々返事もし得ないので、ですから大抵なら此方であるん
な事を云ひ出して、又泣かせるでもないと思ひまして、わざと氣付かぬ
様子に通りぬけやうとしますが、何時も先方で目ざとく見付けては、息
子の事を云ひ續けて、戦争の成行きを聞き度るのでした。而して待ち
に待つた息子が目出度く無事に歸つて来て、ヤレ嬉れしやと思ふ間も無
く彼様した重忠にれついたので、今考へて見ますと、餘りに案じ
過して、最早其頃から少々氣がふれて居たのかも知れません。
それは兎に角、高慢で眼の見えぬ上、中風病の老父と、狂人の母親と
を左右に抱えた一本榎の權サは、假令眼のふちの赤いお嫁にもしろ、今

日から新しい手助けを得て、幾らかの胸も和らいだでせうが、母親は
又今夜も恥しがつて逃げ出すのぢやありませんか。